様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００３０１

研究課題名（和文）日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究

研究課題名（英文）Historical study of critical representations in modern Japanese mysteries

研究代表者
押野　武志（Oshino, Takeshi）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：７０２７００３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　日本において1920年代に成立した「死」や「恐怖」を素材とするミステリは、20世紀以降の危機的事象（疫病、関東大震災、戦災、阪神淡路大震災、東日本大震災、原発事故等）をどのように受け止め応答しようとしたのかを究明する共同研究であった。
　社会と個人、虚構と現実といった単純な二項対立では捉えきれない、ミステリと危機的事象との錯綜した関係性を記述するための新たな研究方法の理論構築を目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ミステリ研究の社会的な重要性と学術的価値を高めることができた。SF、幻想文学、リアリズム小説、サブカルチャーなどと隣接し、接合点ともなりうるミステリ固有の危機表象の特質を明らかにし、20世紀以降の新たな文学と社会との関係性や危機的状況への応答可能性を究明することができたからである。また、危機表象を視座に100年単位の日本近現代ミステリ史を構築し、ミステリ概念の変容の過程を体系的に記述する初めての試みとして学術的に評価することができる。さらに、これまでの文学及び文学研究が前提としていたような、虚構と現実、あるいは真実性といった理論的前提を再考する視座を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：　This research aims to investigate how Japanese mysteries that were established in the 1920s represented critical events from the 20th century onward (epidemics, the Great Kanto Earthquake, war damage, the Great Hanshin-Awaji Earthquake, the Great East Japan Earthquake, nuclear power plant accidents, etc.).
　We aimed to construct a theory for a new research method to describe the complicated relationship between mystery and critical events, which cannot be grasped by simple binary oppositions such as society and individual, fiction and reality.

研究分野：日本近代文学

キーワード：探偵小説　震災　戦災　災害　危機表象　ミステリ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の背景としては、東日本大震災後の、木村朗子『震災後文学論』（2013、青土社）、前田潤『地震と文学』（2016、笠間書院）、限界研編『東日本大震災後文学論』（2017、南雲堂）、千葉一幹『現代文学は「震災の傷」を癒やせるか』（2019、ミネルヴァ書房）といった一連の震災後文学論の登場がある。これらは必ずしも東日本大震災を題材とする文学作品に留まるものではないが、視座の中心は危機やカタストロフを描いた記録文学や記憶表象に置かれており、ミステリへの言及が皆無に等しい。

　そもそも、日本のミステリは、大衆的な人気はあるものの、学術研究対象の端緒となったばかりで、包括的なジャンル論及び史的研究は、国内外においてあまりなされていない新領域である。そのため、危機あるいは大量死をめぐる表象研究を通して、文学一般に還元されないミステリ固有のジャンル研究は、画期的な試みとなる。

（２）日本のミステリ史を再考するにあたって、ハワード・ヘイクラフト『娯楽としての殺人』（林峻一郎訳、1992、国書刊行会）の探偵小説と民主主義との親和性や笠井潔『探偵小説論』ⅠⅡ（1998、東京創元社）の大量死の経験と本格探偵小説の成立の不可分性、あるいは、法月綸太郎「初期クイーン論」（『現代思想』1995・2）によって提唱された探偵の推理の誤謬性（「後期クイーン的問題」）、さらに小森健太朗『探偵小説の論理学』（2007、南雲堂）の、現代ミステリの分析概念として提唱した「ロゴス・コード」をめぐる議論など、ある時期の探偵小説の特質を部分的に捉える論点や分析概念はこれまでにも提出された。

　しかしながら、一貫したパースペクティブから日本近現代ミステリ史を黎明期から今日まで射程に入れたミステリ史は、押野武志・谷口基・横濱雄二・諸岡卓真編著『日本探偵小説を知る―一五〇年の愉楽』（2018、北海道大学出版会）まで待たなければならなかった。本研究は、その成果を踏まえつつ、さらに上述の分析概念や観点を導入して危機表象の特質を分析し、20 世紀以降の大量死の経験に基づく危機表象をめぐる日本ミステリ史を個別具体の相の下に構築する。

２．研究の目的

（１）日本において 1920 年代に成立した「死」や「恐怖」を素材とするミステリは、20 世紀以降の危機的事象（疫病、関東大震災、戦災、阪神淡路大震災、東日本大震災、原発事故…）をどのように受け止め応答しようとしたのかを究明する研究である。謎解きという高度に読者参加を要求するこのジャンルは、知的ゲームという娯楽性と、読者が作品にコミットする当事者性も備わっている。こうしたミステリの表現形式の特殊性と歴史的事象との関係性を通史的に分析することで、日本近現代ミステリ固有の危機表象の特質を明らかにする。そのために、社会と個人、虚構と現実といった単純な二項対立では捉えきれない、ミステリと危機的事象との錯綜した関係性を記述するための新たな研究方法の理論構築を目指す。

（２）「死」を扱う文学形式としてのミステリは、カタストロフと親和性が高いにもかかわらず、その関係性については充分に言及されてこなかった。そこで、本研究では、ミステリという文学形式が、危機をどのように表象するかを、新たな理論的な枠組みを用いながら個別具体の作品を系列毎に分析する。こうした、ミステリにおける危機表象の変遷史の究明を通して、今日的な危機と大量死をめぐる想像力の限界とそうした危機に応接するための新たなミステリ的想像力の可能性の提示を試みる。

３．研究の方法

（１）日本近現代の危機表象をめぐるミステリと個人、あるいは社会との関係性の枠組みの変容を記述するためには、100 年（1920 年代～2020 年代）という長いスパンが有効である。長期的な日本のミステリ史の構築のための役割分担を行いながら研究を遂行した。

（２）ミステリ固有の危機表象史を究明するために、同時代の言説や周辺ジャンルとの共時性や差異にも着目して分析を行う「ミステリ」は、広義にはエンターテインメント一般を指し、狭義には論理的謎解きを中心とする「本格探偵小説」という意味でも用いられる。戦前には、「本格／変格」という二項対立があったが、ミステリ概念がさらに拡散化するのは、70 年代以降である。「社会派推理小説」「ハードボイルド」「アンチミステリ」「サスペンス」「新本格ミステリ」「脱格ミステリ」「日常の謎ミステリ」などの呼称やサブジャンルの成立の背景と他ジャンルとの関連性を明らかにして、日本のミステリの歴史的文脈の広がりとその特殊性を浮上させる。そのためには、ミステリ成立の要件としての知の枠組みの設定、謎解きをめぐる論理の哲学的考察、読書行為を内包した虚構論など新たな分析方法の創出を目指す。

４．研究成果

（１）ミステリ研究の社会的な重要性と学術的価値を高めることができた。SF、幻想文学、リアリズム小説、サブカルチャーなどと隣接し、接合点ともなりうるミステリ固有の危機表象の特質を明らかにし、20 世紀以降の新たな文学と社会との関係性や危機的状況への応答可能性を、ミステリというジャンルを通して究明することができた。危機表象を視座に 100 年単位の日本近現代ミステリ史を構築し、ミステリ概念の変容の過程を体系的に記述する初めての試みとなった。これまでの文学及び文学研究が前提としていたような、虚構と現実、あるいは真実性といった理論的前提を再考する視座を提供することができた。カルチャー／サブカルチャーにまたがる境界的なジャンルとしてのミステリの特質を明らかにすることで、虚構と現実の二分法が成立しない今日的な日本の総体的な文化状況の見取り図を描き、新たな研究方法を提示することができた。作品世界への読者の「没入」の高さやゲームとしての状況設定の荒唐無稽さが同居するこのジャンルは、旧来の自然主義的なリアリズムとは異なる、読者が求める今日的な「情動的カタルシス」と「真実性」を提供していることを実証できた。

（２）押野武志（研究代表者）は、主として 2000 年代以降のミステリを対象とした。虚構と現実との錯綜した関係性をミステリにおける災害表象の特質を通して究明した。ミステリのゲーム性や娯楽性と自然主義的なリアリズムが衝突したときに生じる、ジャンル的な臨界点や変容を「フラット」概念を通して記述することができた。１年目は、柴田哲孝『漂流者たち』(2013）や相場英雄『共震』(2013）など東日本大震災の衝撃を作品化したものを中心に分析した。２年目は、高村薫『神の火』(1991)、東野圭吾『天空の蜂』(1995)、島田荘司『ゴーグル男の怪』(2011）など原発事故やテロをモチーフにしたミステリやハードボイルドの系譜も辿った。こうした分析作業を通して、３年目には、ミステリ的想像力に基づく危機表象とリアリズム概念の変容を体系的に整理したうえで、因果論的な思考や論理学的な推論とは異なる、確率論的な思考に基づく今日的なミステリの特質を総括することができた。

（３）横濱雄二（研究分担者）は、神戸在住という地理的条件を生かし、第二次世界大戦の神戸戦災および阪神・淡路大震災とミステリの関係を、理論的・歴史的に整理し、具体的な作品分析と組み合わせて考察した。1 年目を基礎構築期と位置づけ、主として理論的・歴史的な探究を進める。二つの危機をめぐる言説の生成・流通過程を、文学のみならず歴史学、社会学についても視野を広げて文献を蒐集・考察した。2 年目を実証期と位置づけ、具体的なミステリ作品の分析を進めた。戦災については『悪魔が来たりて笛を吹く』(1954) などの横溝正史作品を中心とし、阪神・淡路大震災については谺健二『未明の悪夢』(1997)、東野圭吾『幻夜』(2004)、横山秀夫『震度 0』(2007）などを取り上げた。3 年目は成果集約期と位置づけ、これまでの理論的・歴史的探究と作品分析を集約し、ミステリ作品の情動的カタルシスが危機表象との関連においていかに生起するかを明らかにすることができた。

（４）諸岡卓真（研究分担者）は主として 1980 年代後半以降の本格ミステリを対象とし、感染症および自然災害とミステリとの関係について検討した。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、それを作品に取り込んだミステリを継続的に調査するとともに、それ以前に発表された深谷忠紀『1 万分の 1 ミリの殺人』(1987)、岩木一麻『時限感染』(2016）などの作品分析も進めた。自然災害については、特にクローズドサークルの構成要因となる吹雪や山火事、火山の噴火などの事象に注目し、有栖川有栖『月光ゲーム』(1989）などを取り上げてその特質を探った。1 年目は感染症および自然災害を扱った作例の調査を行った。2 年目は、特徴的な作例を取り上げて作品分析を行った。3 年目は前年までの調査・分析を踏まえて感染症や自然災害を扱った本格ミステリにおける「危機」表象の特質を明らかにするとともに、それらを導入したミステリ作品の謎解きとの関連性を明らかにすることができた。

（５）高橋啓太（研究分担者）は、ハンセン病と第二次大戦の戦災をテーマとして研究を進めた。ハンセン病に関わる危機表象は、死でもパンデミックでもなく、差別の問題を前景化させる。一方、戦災は焦土と大量死というカタストロフィをもたらすが、文学作品においては戦後の出発点として表象されてきたことも確かである。この二つの危機表象が犯行と謎解きに結びついているミステリが、松本清張『砂の器』(1961）である。すでに、ハンセン病に対する差別意識については批判されているが、戦災表象にも注目することで再評価を試みた。1 年目は、近代文学におけるハンセン病表象を調査し、『砂の器』の歴史性を見極めた。2 年目は、戦後文学の中で戦災表象がカタストロフィであると同時に戦後の起点としても機能していた例を検証した。3 年目は、それまでの調査・分析を踏まえて、『砂の器』を筆頭とした社会派ミステリが 1960 年代の文壇文学と大衆文学の空隙を埋める位置を占めた要因を追究することができた。

（６）井上貴翔（研究分担者）は、関東大震災と 1920‐30 年代におけるミステリの関係を探った。「帝都」における犯罪やそれに関連する「危機」を表象する当時のミステリが、震災後の「帝都」言説と共振しつつジャンル的発展を遂げたことを、具体的な作品分析を通して明らかにした。また、当時のミステリでは廃屋や療養所、病院といった場が頻出するが、これらを「帝都」にお

ける「危機」が具体化する場として捉えなおし、ミステリを、震災後における危機表象と場所性の相関という視座から通史的に記述することを目指した。1 年目は研究計画の基礎となる「帝都」や療養所他に関する言説を収集し、整理・考察を加えた。2 年目は、小酒井不木や江戸川乱歩による諸作や久生十蘭『魔都』（1937）といった作品の具体的な分析を進めた。3 年目は以上を総合し、1920-30 年代の探偵小説における「危機」表象の特質および、それと実際の「危機」言説の関連性を明らかにすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 押野武志	４．巻 16
２．論文標題 山口雅也『生ける屍の死』の位置―スペキュレイティヴ・ミステリの可能性	５．発行年 2024年
３．雑誌名 層：映像と表現	６．最初と最後の頁 110-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋啓太	４．巻 17
２．論文標題 五味川純平著作目録―ベストセラー作家の需要に関する研究のために	５．発行年 2024年
３．雑誌名 リテラシー史研究	６．最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋啓太	４．巻 56
２．論文標題 五味川純平『自由との契約』試論――物語の設定とポストコロニアルの視座	５．発行年 2024年
３．雑誌名 花園大学文学部研究紀要	６．最初と最後の頁 31～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 押野武志	４．巻 15
２．論文標題 探偵小説から推理小説へ―辻真先〈昭和ミステリシリーズ〉における戦争	５．発行年 2023年
３．雑誌名 層：映像と表現	６．最初と最後の頁 212-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 横濱雄二	4．巻 70
2．論文標題 メロドラマとミステリ再考―『砂の器』を手がかりに	5．発行年 2023年
3．雑誌名 甲南国文	6．最初と最後の頁 169-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高橋啓太	4．巻 55
2．論文標題 戦後の鞍山を描く―五味川純平『人間の條件』『歴史の実験』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 花園大学文学部研究紀要	6．最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井上貴翔	4．巻 29
2．論文標題 日本における〈指紋小説〉の展開（2）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 北海道医療大学看護福祉学部紀要	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 井上貴翔	4．巻 15
2．論文標題 「論理」と「科学」の分離―横溝正史「本陣殺人事件」と江戸川乱歩	5．発行年 2023年
3．雑誌名 層：映像と表現	6．最初と最後の頁 227-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 押野武志	4．巻 83
2．論文標題 少女独白体の新展開―一九七〇年代以降	5．発行年 2021年
3．雑誌名 昭和文学研究	6．最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋啓太	4．巻 82
2．論文標題 「戦後文学」の再審―『〈戦後文学〉を読む』を手がかりに	5．発行年 2021年
3．雑誌名 昭和文学研究	6．最初と最後の頁 220-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋啓太	4．巻 54
2．論文標題 五味川純平の引揚げ体験―鞍山・大連での動向	5．発行年 2022年
3．雑誌名 花園大学文学部研究紀要	6．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 押野武志
2．発表標題 大量死と推理小説―辻真先『たかが殺人じゃないか―昭和24年の推理小説』を中心に
3．学会等名 令和4年度第1回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
4．発表年 2022年

１．発表者名 押野武志
２．発表標題 80年代ミステリの帰趨―山口雅也『生ける屍の死』を中心に
３．学会等名 令和4年度第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2023年

１．発表者名 横濱雄二
２．発表標題 ミステリとサバルタニティ
３．学会等名 令和4年度第1回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 横濱雄二
２．発表標題 高畑勲『火垂るの墓』における地域表象
３．学会等名 第6回北海道大学映像・現代文化論学会大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 横濱雄二
２．発表標題 ミステリにおけるサバルタニティの検討―横溝正史作品を手がかりに
３．学会等名 令和4年度第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2023年

１．発表者名 諸岡卓真
２．発表標題 危機と密室
３．学会等名 令和4年度第1回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 諸岡卓真
２．発表標題 感染症と社会派ミステリ―松本清張『屈折回路』論
３．学会等名 令和4年度第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋啓太
２．発表標題 松本清張『砂の器』における地方性
３．学会等名 令和4年度第1回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋啓太
２．発表標題 近代文学におけるハンセン病表象―松本清張『砂の器』を中心に
３．学会等名 花園大学人権教育研究会第117回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋啓太
２．発表標題 「研究リソース」としての五味川純平―『職業作家の生活と出版環境』との接点
３．学会等名 『職業作家の生活と出版環境』シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋啓太
２．発表標題 松本清張『砂の器』における過去―『ゼロの焦点』との比較から
３．学会等名 令和4年度第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2023年

１．発表者名 井上貴翔
２．発表標題 震災・帝都・探偵小説
３．学会等名 令和4年度第1回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 井上貴翔
２．発表標題 戦前期探偵小説における〈異界〉表象
３．学会等名 令和4年度第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2023年

１．発表者名 押野武志
２．発表標題 危機表象とミステリ
３．学会等名 第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 横濱雄二
２．発表標題 ミステリにおけるメロドラマ性についての検討
３．学会等名 第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 横濱雄二
２．発表標題 メロドラマとミステリ再考―『砂の器』をてがかりに
３．学会等名 科研費プロジェクト合同オンライン研究集会「〈国民〉を縫い直す　貫戦期におけるメロドラマ的想像力の歴史的位相」
４．発表年 2022年

１．発表者名 諸岡卓真
２．発表標題 感染症とクローズドサークル―今村昌弘〈剣崎比留子〉シリーズを例 に
３．学会等名 第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋啓太
２．発表標題 社会派推理小説の説話的構造と戦後性ー松本清張『砂の器』
３．学会等名 第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 井上貴翔
２．発表標題 戦時下都市と探偵小説
３．学会等名 第2回研究報告会「日本近現代ミステリにおける危機表象の史的研究」
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 米村みゆき・須川亜紀子編著、横濱雄二他共著	４．発行年 2022年
２．出版社 七月社	５．総ページ数 352
３．書名 ジブリ・アニメーションの文化学	

１．著者名 乾英治郎・小松史生子・鈴木優作・谷口基編著、諸岡卓真他共著	４．発行年 2022年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 330
３．書名 〈怪異〉とミステリ	

１．著者名 押野武志・吉田司雄・陳國偉・卜銘宏編著	４．発行年 2022年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 360
３．書名 交差する日台戦後サブカルチャー史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	横濱　雄二 (Yokohama Yuji) (40582705)	甲南女子大学・文学部・教授 (34507)	
研究分担者	諸岡　卓真 (Morooka Takuma) (40528246)	北星学園大学・経済学部・教授 (30106)	
研究分担者	高橋　啓太 (Takahashi Keita) (50598638)	花園大学・文学部・准教授 (34313)	
研究分担者	井上　貴翔 (Inoue Kisyo) (70770551)	北海道医療大学・看護福祉学部・講師 (30110)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関